

# 人と人 つながりの物語



illustration: Maiko Dake

コープデリグループの  
組合員数は約520万人。  
組合員の皆さんの数だけ、  
物語がある。その物語を  
毎月一つお届けしていきます。  
描いているのは皆さんのくらしと  
コープデリの接点。  
あなたの物語はどんな物語ですか。

クマのぬいぐるみの「ポコちゃん」は長野県で暮らす徳高淳子さんが、35年前、結婚前に夫からもらった大切なプレゼントである。いつも洋服を着せて、連れ歩いている。

「ポコちゃんは最初、私の宝物でしたが、家族みんなの宝物になっていきました。わが家の仲良しの秘訣は、言いたいことは我慢せずに言い合うこと。だけど、家族だからといって相手を気遣わない言い方は良くないですよ。だから、言いにくいことはポコちゃんに言ってもらいます。そうすると、ぎくしゃくしないです」  
ポコちゃんは家族の一員。どの家族写真にも、たいていポコちゃんが写っている。

淳子さんがコープなの組合員になったのは、今から28年前。当時2歳だった長女のママ友に誘われた。配達担当は30歳前後、角刈りの男性でメガネをかけた優しい雰囲気の人。名前は思い出せない。たくさんは話さないが、毎週何か会話をした。組合員になった2年後には長男・諒さんが生まれ4人家族になった。

諒さんが2歳になったある日。いつものように諒さんとポコちゃんと、車で100mほど離れた

お宅へ宅配商品を受け取りに行った。息子の手を引いてグループ配達のメンバーと話し、商品を分けて、回収してくれるまごバックを入れた紙袋を担当者に渡して自宅へ帰った。ふと気づくとポコちゃんがいなかった。諒さんに「ポコちゃんはどこ？」と聞くと、まだちゃんと話せなかった息子は首を振っていた。

「私はパニックになってしまっただけで、どうしよう！って思いました。泣きながらよく記憶をたどっていくと、たまごバックを入れた紙袋に入れてしまったかもしれないって思っただけです。両手がふさがっているときに、いったんここに入れておこうって。慌てて宅配センターに電話しました」

淳子さんは、とにかくポコちゃん不在が不安だった。当時はまだ携帯電話もなく、直接配達担当者に連絡を取る術がなかった。宅配センターの職員に電話で事情を話すと、とても親身に対応してくれた。しばらくして、電話がかかってきた。まだ配達中の担当者が公衆電話から電話をくれたのだ。彼は「手のひらくらいのサイズのクマちゃんですよ。安心してください。今僕と一緒にドライブしています。配達後の夕方にお届けしますね！」と言った。

「声がかつても優しく、安堵したのを覚えています。ポコちゃんはお兄さんとドライブして家に帰ってくるんだって。子どもたちにもそう説明しました」  
その日の夜7時頃、約束通り配達担当のお兄さんに連れられてポコちゃんが戻って来た。彼は大事そうに両手のひらにポコちゃんをのせていた。淳子さんはどれだけのありがとうを言っても足りないと思った。そしてあやまった。

彼はこう言った。「袋の中をその場で確認しなかった僕がいけなかったのですから、そんなにあやまらないでください」  
淳子さんはそのとき、自分のことばかり考えていて周りの気持ちなど考えていなかった自分自身が気がついた。今、こうしておそらく仕事後の帰り道に立ち寄ってくれた彼も、電話対応してくれた職員さんも、重大な事柄として扱ってくれた。きっと普段から、彼らは私たちのくらしを大切に思ってくれていたのではないか？

その日以来、淳子さんにとってコープは特別な存在になった。ポコちゃんは今も、徳高さん家族と一緒に暮らしている。

過去の物語も  
こちらから読めます



あなたのエピソードを  
お寄せください。

コープ職員との心に残る出来事を随時募集しています。氏名・電話番号・組合員コードを記入し、郵便(〒336-8526埼玉県さいたま市南区根岸1-4-13 コープデリ連合会 コミュニケーション推進部宛)か、左記のWeb応募フォームよりお送りください。